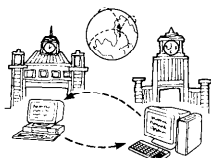


巻頭言



異分野の人との対話

長尾 眞[†]



情報分野の特徴

情報科学はこれまで計算機を中心として目ざましい発展をしてきた。しかしそれは計算機の側からの論理によって進んできたわけで、それによって裨益される人間や社会の側からの論理によるものではなかった。情報はあらゆる対象に存在する。対象との共存という環境によって自分にとって情報が顕現化される。そして対象を深く理解すればするほど対象の情報が豊富となり、その情報の中にひそむ構造が明確になってくる。

それぞれの対象の持つ情報の性質や構造を深く知ることがまず必要となる。しかし、それはこちらの持つ枠組の中にはめ込んで理解するのではなく、対象自身の持つ枠組を探り出さねばならないのである。そうでないとほんとうの理解ができたことにはならないだろう。

相手を理解すること

法律情報システム、電子図書館システム、遺伝子情報システム、医療情報システムなど、最近ではあらゆる分野に情報システム的な考え方が入ってゆきつつある。しかしこのような場合はそれぞれの分野が確立した体系をもっており、これが我々情報科学の側の物の考え方とは大きくかけはなれたものであることが多い。まず相手のもつ学問体系がどのようなもので、それはどのような考え方に立って作られてきたものであるかを理解することに成功するかどうかが最も大きな関門である。それが理解できたとして、それを忠実に実現するシステムを作ることができて、まずは及第点というところである。

新しいものの創造

しかしそれだけでは、その分野の活動の効率が上がったというだけのことである。相手の分野の考え方を知り、その体系を十分把握した上で、こちらのもつ学問体系、考え方、技術とのぶつかり合いの中からそこに新しい考え方、新しい枠組を創造することが最も大切なことである。それはその分野の学問体系の発展に寄与するものであるとともに、こちらの側、すなわち情報科学においてもそれが新しい課題であり、それがこれからの情報科学の進歩発展につながって行くものであることが必要である。

異分野の人との対話

研究者にとって最近では発表論文の数が問題となる厳しい時代となって来ている。それに伴って人々は狭い範囲の定まった枠組の中で研究を行い、論文を生産するようになってしまい、他の分野に対する関心は非常にうすれてしまっている。他の分野に首を突っ込んでいては論文数を稼げないからであろう。しかし、このような状況は少なくとも情報科学の分野では深刻な問題である。異分野に関心を持ち、恐れずにその中に入って行って、そこでの人達と徹底的な対話を行う必要がある。そうすることによってのみ明日の情報科学があるとさえいえるのではないだろうか。ただ、他分野の人達と対話を行うためには自分の分野の知識を十分に持っていることは当然なことである。対話とは対等の立場において初めて成り立つのだから、いずれにしてもこのような根本問題をよく考えるべき時期にきているし、そうした余裕を持たねばならないだろう。

(平成6年11月28日)

[†] 本会副会長 京都大学